

薦むる。

影繪寒く傳兵衛と手が映りけり

西 鶴

寫生文でも勿論見た事を其儘書く事は出来ぬ、又其儘書けたとしても其が立派な美文とはいへぬ、材料の取捨選擇といふ事が其大問題の一であることはいふ迄もあるまいが、尙今日の多くの寫生文は其取捨選擇の度合ひが充分で無い。今一息き思ひ切つて取捨選擇をしたら善からうといふ説がある。尤もだ。扱て其説に従つて思ひ切つて取捨選擇をした寫生文を書くとして文體はどういふ

文體が善からうか。舊に據つて言文一致か、其とも調子のある文章體がよからうか、これは一寸疑問だと思ふ。言文一致は詳細な敘述をするのに適して居る。引きつゝいた事を順序よく寫すのに適して居る。若し簡潔を貴び、精彩ある飛びくゝの事柄だけを選び抜いて結び附けやうといふには寧ろ文章體の方が便利かと思はれる。西鶴の文章なども好手本の一つであらう。

秋 風 や 二 代 男 の 虫 の 殻

準備時代

史料蒐集家曰く、史料も際限が無い、一生集めても集め切れるものには無い。

準備時代

併し史料の蒐集といふ事よりも難事なのは其各史料を活して結びつける歴史家としての頭だ。

曰く、此の頭を作るには、先づ手ツ取り早く西洋の有名な歴史家の頭でも學ぶがよ。

曰く、今日の時代は史料蒐集代時だ。我等の仕事は次の時代の歴史家の爲に準備を爲すに終る。

曰く、歴史家の仕事も詩人の仕事も必竟皮一重だ。ランケとゲーテは殆ど同一の仕事をやつて居る。唯ランケよりもゲーテの方が想像を逞くし得る地位に立つたゞけ位のところが相違だ。

寫生文家曰く、寫生も際限が無い、一生寫生してもし盡くせるものでは無い。併し寫生といふ事よりも難事なのは其寫生した各材料を結びつける詩人として

の頭だ。

曰く、此の頭を作るには、先づ手ツ取り早く西洋の有名な詩人の頭でも學ぶがよ。

曰く、今日の時代は寫生文時代だ。我等の仕事は次の時代の詩人の爲に準備を爲すに終る。

曰く、五十年後か百年後かランケやゲーテが生れた時、我等の仕事は其銅像と臺石の一つになる事が出来たら本望だ。さういふ情け無い時代に生れ合せたのを不仕合せとあきらめる許りだ。

空中に聲あり曰く、それでは今日の歴史や小説は冬の日南の暖かさに狂ひ咲いたる歸り花位の處かぬ。

歸り花にあらぬ早梅もあらぬべし

感 覺 美

俳句で謠ふ美は主として感覺美だ。近頃の文學者などがやかましくいふフヒロソフヒカルな點などは絶無といつてよい。

寫生文で描く美も主として感覺美だ。同じくフヒロソフヒカルな點などは絶無といつてよい。

俳句、寫生文びいさの人は此際美は感覺美あるのみだ、といふか、しからざれば俳句及び寫生文にもフヒロソフヒカルな處があるともいへる、と主張したがる。

余は此主張に不賛成だ。俳句及寫生文は何處迄も感覺美に立脚する。さうして

美は必ずしも感覺美のみでは無い。俳句及寫生文の長處は其純粹に感覺美に立脚せる處に在る、言を換ふれば俳句及寫生文は其點に於て他の文學よりも數百歩陣頭に驀進して居る。フヒロソフヒカルな點が無ければ満足せぬ人は俳句及寫生文を輕蔑するが、其は一方に短處で一方に長處だ。楯の一面は泥土だが、他の一面は黄金だ。

俳 諧 は 紙 衣 の 裏 の 錦 かな

背景を控へたる場合

背景に大事件を控へた場合は平凡な記事も活躍する。たとへば鴨綠江で日露戦

背景を控へたる場合

争の第一幕が開かれた夜、西洋の或従軍記者は黒木大將を訪ふて「其夜の黒木大將」といふ文を草したといふことを聞いた。此文章は余は見なかつた。またどんな内容であつたか聞きもらした。唯此題目だけ聞いて旨いと思つた。日露戦争の而も序幕といふ非常に人の注意を牽く大きな背景を控へて居る。已に此背景の前に立つた以上は何事でもものになる。従軍記者が大將の幕營に這入つた時大將が、たとへば椅子に稍々仰向き加減に凭れてゐたとか、左の脚を右の脚に重ねて居つたとか、葉巻の灰を眺めて居つたとかいふやうな些細な記事、普通の場合は殆ど一顧の價值無き記事が、既に大に人心を動かす。其から記者と卓を隔て、坐して話した話しが、何だか雨が降つて來さうだとか、煙草が濕つて居て困るとか、少し風邪を引いたやうだとか、尋常一様の茶談でも大いなる興味を以て見ることが出来る。又此際に於ける大將の風采は、唯顔の四角な田

舎親爺のやうであつた、と書いても其は背景の壯美を傷けぬ許りか、却て其を強めるやうになる。極言すれば斯る大きな背景を控へた場合は其記事が大事件であるよりも却て小事件である方がより多く力ある文章となるかとも覺える。西洋あたりの歴史小説のうちにナポレオンの大戦争を背景にして小百姓の息子の情事などを書いたのがあるのも此手段に基く。卑近な例でいへば「忠臣蔵」のうちでも輕勘平の情事が活躍して居る類だ。

品川で海軍の勇士が何十人か溺死したといふ記事は都下の人心を聳動した。此際の新聞の記事なども此筆法でいつたら面白からうと思ふ。或新聞にあつた、何某大尉が救濟事務所で「何兵曹、何水兵」と點呼をすると返事するものより行衛不明にて答の無いものが多い、一同悄然として居る處へ後れて來た一水兵が忙しげに驅より、大尉の顔を見るや「分隊長殿、達者で歸りました」といふと、

大尉は「ウンさうか」と力ある言葉で答へたといふやうな記事は頗る生命があつて此一小記事の爲めに其救濟事務所の光景が活寫されたやうに覺えた。之も大背景の前の小事實を描いたのである。

背景 は 大 山 眠 り 畑 打 つ

寫生文四法

昨日いつたやうに大きな背景を控へて文章を作るのは面白い。此他文章殊に寫生文を面白くする方法は、

第一、あまり人の知らぬ舞臺を擇む事。背景も何も無い平凡な材料では嫌たら

ぬ。爰に於て作者は廣い意味に於ける冒險をやる。貧民窟に入り込むとか、或家庭に這入つて見るとか、外國行の船にボーイに傭はれるとか、鑛山の鑛夫になりすますとかいふ類だ。斯ういふ事をやつて見聞した事を寫生したら必らず面白い。

第二、大きな背景もなく又冒險をやるやうな機會も無い場合は日常ありふれた事を寫生せねばならぬ。此場合二つの方法がある。其一は、極端な例を取つていへば、丸い卵を無理に四角に觀るといふやうな觀察法だ。詳しくいへば、誰が目にも平凡、陳腐に見える事を、作者の他の人と異なる頭で格段な觀察をする、さうすると平凡な事が平凡で無く、陳腐な事が清新の氣を帯びて來るやうになる。丸い卵を四角に見るのは無理だが、駝鳥の卵を獨體と見る位の事は其程無理では無い、古來詩人の頭の俗人に異なるのは主として此の點に在る。こ

れは價值ある作文家の技倆である。

第三、は其二で、これは平凡陳腐な事をなるべく精細に且つ實らしく叙する。

普通の人はずっと上滑りした觀察をするものだ。其を特別に鋭敏な頭で觀察すると人々の氣のつかぬ處を見出す。其を捉へて書くとき普通の人には成程と感心をする。此場合は平凡陳腐な事が矢張平凡で無くなる。これも作文家の力を盡すべき點だ。

第四、は平凡陳腐な材料を平凡陳腐に觀察して唯文章の面白味で釣らうとする。これはあまり價值の多い方で無い。

以上は單獨に一つだけ持つて居つたら立派な文章だ。二つ以上を併有するやうになつて愈々立派な文章だ。

山茶花に尙挿し添ふや水仙花

「埋れ木」

「水沫集」中に在る「埋れ木」は十餘年前から愛讀する小説である。此シユビンといふ女作者は獨逸では第一流の大家では無いさうだが、感じのよい作としては洵に尊重すべきものだと思ふ。天才ある音楽家が世才ある音楽家ステルニイの爲に陥れるるといふのが一篇の眼目だが、其經過を描く爲に用ゐられて居る舞臺が悉く感じのよい舞臺許りで、厭やな事を描かなげりやならぬ場合は巧みに陰に隠くしてしまつてある。さうして筆路が自然で少しも偽らしい處が無い。其上筆が簡潔である。唯強ひて缺點をいへば強みが足らんかも知れん。併し強みの足らんといふ事は作の純粹な證據にもなる。

埋れ木

にこり江
 鶉鴉いづれか強き鳥ならん

「にこり江」

古く人に借した一葉全集が今日歸つて来て机の上に在る。讀む積りでも無く巻頭の「にこりえ」を讀む。先づ「押かけて行つて引ずつて来るからさう思ひ」「嘘つ吐きだから何をいふか知れやしない」といふやうな矢場女のあはずれた言葉が面白い。それから進んでお力が結城朝之助を綾なして、「蒲團の上に乗せて置きし紙入れを取あげて、お相方の高尾にこれをお預けなされまし、皆の者に祝儀でも遣はしましやうとて答へも聞かず、ずんぐりと引出す」ところから「嘘か

にこり江

誠か九十九夜の辛防をなさりませ、菊の井のお力は鑄型に入つた女でござんせぬ、又形のはかる事もあります」といふあたり鋒鉈鋭利で溜飲が下る。更にずつと進んで、お力が「酔ふたら介抱して下され」と大湯呑に酒をあふつて朝之助に身の上話をする一段、殊に「寒中親子三人ながら古浴衣で、……味噌こし下げて端たのお錢を手に握つて米屋の門までは嬉しく驅着けたれど、歸りには寒さの身にしみて……足溜りなく轉げる機會に手の物取落して一枚外れし溝板のひまよりざら／＼と翻れ入れば……立て暫く泣いてゐたれど何うしたと問ふて呉れる人もなく、聞いたからとて買つてやらうといふ人は猶更なし、……私は其頃から氣が狂つたのでござんす、歸りの遅さを母親の案じて尋ねに来てくれたをば時機に家へは戻りたれど母も物いはず父親も無言に、誰一人私をば叱る者も無く、……今日は一日斷食にせうと父親のいひ出すまでは忍んで息をつく

やうでござんした。」といふあたり到底偽りの筆では無い。一葉女史が實驗談であらうと思ふ。

要するにお力は生きて居る。其他の人物は流石に幼稚だ。今日の作者の方が大分進歩して居る。心中を描く前の筆も端折りすぎてあつて物足らぬ。

女史は余より二歳の年長者だ。生きてゐたら今年三十五だ。二十三歳で既に斯ういふ、傑作と迄は行かずとも、他に一寸類の無い作をして居る。えらいなあと思ふ。

と思ひて冬の俳句を選びけり

鷗外漁史の「有樂門」

従來の寫生文は人間を寫さずに事件を寫す。詳しくいへば人間の面白い處を捕へずに事件の面白い處を捕へる。俳人は俳句によつて養はれたる觀察眼から人間の面白味よりは事件の面白味の方に重きを置く。これが寫生文の上にも同一傾向として現はれた。鷗外漁史は曩に寫生文を作つたよ、と話された。其は「心の華」の百號に出た「朝寢」であつた。此の一月の「心の華」にも「有樂門」といふ漁史の作がある。これも「朝寢」と同類のものである。「朝寢」といひ「有樂門」といひ初め之を讀んだ時は寫生文といはるゝのを一寸變に思つたが、退いて考へて見ると慥に面白い一種の寫生文である。従來の如く事件を主にした寫生文で無くて人間を主にした寫生文である。

「朝寢」は暫く措く。「有樂門」に就て見ると日比谷公園有樂門に於ける電車の昇降客の混雜を描いたものである。否、これが事件を描く寫生文であつたら昇降

客の混雑を描く事になるであらうが、漁史は昇降客の混雑を描くよりも、其混雑の際に處する車掌其人を描いた。

掌車は乳の香まだ失せぬ小男にて、色白く髯のあと蒼く、著たるは極まりの小倉服に（中畧）今職人らしき男の肩尖を押し戻しつゝ左手を長く差し伸べて、掌を開き、芝居めきたる姿勢を取りて立てる車掌は、車を争ふ二十人あまりの客を両手もて押さへて、額狭く眉根蹙まり、常に嘲ける如き微笑を湛へたる面に、己が権能の十分に發揮せられたるに満足なる色を呈せり。斜に射下す夕日の光は車掌が開きたる掌に中りて、展べたる織き長さ指の透明なるかを疑はしむ。

といひ、又

十五ばかりの小僧の（中略）職人の腋の下を潜りて再び突貫を試みしに、車掌

は従容として右の脚を差し押へ、この小さき反抗者を支へ留めて、昇降口の秩序を維持せり。

といひ、又

「されど、されど奈何せん、透明なる織き長さ車掌の指は、縦令權宜には合はずとも、現に公認せられたる法規の下に、己が権能を行ふものなるを。」

といひ、又

車中所々に笑ふ聲起りぬれど、かゝる品卑しき戯言に借すべき耳は持たじといひたげなる車掌は、例の微笑みつゝ右手さし伸べて、満員の赤き札を下し、鈴索を引き動かしたつ。

といひたる數段の描寫にて、讀者の頭に印象される處のものは其混雑の光景よりも寧ろ、所謂「公認せられたる法規の下に、己が権能を行ふ」車掌其人の方が

力強い。是れ作者が混雑の状態を面白いと感じたよりも、此混雑に處する車掌其人を面白いと感じて此文章を成したからである。反言すれば作者は此車掌に同情を表して書いたからである。「公認せられたる法規の下に己が権能を行ふ」といひ「かゝる品卑しき戯言に借すべき耳は持たじ」といふが如きは事件を描く寫生文には無用の言葉である。さうして人間を寫す寫生文としては有力なる文字である。

事件を描く寫生文は作者其人が主なる登場者として文中に立つて居る。人間を描く寫生文は其人間が主要なる役者として働く爲めに作者の如きは陰に居てよい。假令中に交り立つてもほんの添役たるに過ぎぬ。從來「ほととぎす」の應募文中に稀に此種の物が無い事は無かつた。法師の「行軍曲」で小さい腕白の子供を描いたのも此種に屬する。併し「有樂門」は其最も顯著なる者である。

人間に同情して人間を主として描くものは小説を最とする。「有樂門」の如きは短篇小説といつてもよい。「水沫集」中に在る短篇小説の如きも全く此系統に立つ。しかも、プロットの無き點、事實が單純なる寫生の上に成り立つた點より之を漁史の如く寫生文と稱するのは妥當な事と考へられる。寫生文が此方向に一進路を取るの面白い事と思ふ。

彼方にも橋こそ見ゆれ枯野道

「おあん物語」

「おあん物語」

「おあん物語」といふ本は徳川のはじめ頃の言文一致體の文章で面白い。

子どもあつまりて、おあん様、昔物語なされませといへば、おれが親父は、山田去曆といふて、石田治部少輔殿に奉公し、近江の彦根に居られたが、其後治部どの御謀反の時、美濃の國おほ垣のしろへこもりて、我々みなく一所に。お城にゐて、おじやつたが、不思議な事がおじやつた。

といふやうな文體である。其中に斯ういふ記事がある。

又味方へ取つた首を、天守へ集められて、それ／＼に札をつけて、覺え置き、さい／＼、首におはぐるをつけて、おじやる。それはなぜなりや、昔はおはぐる首は、よき人として、賞翫した。それ故白齒の首はおはぐるつけて賜はれと、頼まれて、おじやつたが、首もこはいものではあらぬ。其首どもの血くさき中に寝た事でおじやつた。

籠城して居る女人達が首におはぐるをつけるといふ記事は面白い。厭ふべき惨酷な場合も、おはぐる付けると云つて感じがよい。

(二)

落城の時の模様が簡單ながら目に見るやうに書いてある。

ある日、よせ手より、鐵砲うちかけ、最早けふは、城も落ち候はんと申す。殊の外城のうち騒いだ事でおじやつた。その處へ、おとな來つて、敵かげなく、しりました。もはやお騒ぎなされな静まりたまへ／＼といふ處へ、鐵砲玉來りて、われら弟、十四歳になりしものにあたりて、そのまゝ、ひり／＼として、死ておじやつた。扱々、むごい事を見て、おじやつたのう。其日我親父のもち口へ、矢文來りて、去曆事は、家康様御手習ひの御師匠申された、わけのあるものじやほどに、城を逃れたくば、御助あるべし、何方へ

なりとも、落ち候へ。路次のわづらひも、候まじ、諸手へ、おほせ置いたとの御事で、おじやつた。城は、翌の日中、責落さるとて、皆々力を落して、我等も、明日は失はれ候はんと、心細くなつておじやつた。親父ひそかに、天守へまゐられて、此方へ来いとて、母人我等をもつれて、北の堀わきより、はしごを掛けて、釣り繩にて、下へ釣り下げ、扱たらひに乗て、堀を向ふへ渡りて、おじやつた。その人数は、おやたち二人、わらはと、おとな四人ばかり、其ほか家來は、そのまゝにておじやつた。城を離れ、五六町程、北へ行きし時、母人俄に、腹いたみて、娘をうみたまひ、おとな、其まゝ、田の水にて、産湯つかひ、引あげて、つまにつゝみ、母人をば、親父背へかけて、あを野が原のかたへ落て、おじやつた。こわい事で、おじやつたのう。むかしまつかふ。南無阿彌陀。

女子供を静める爲に、敵はもう退散したと伴りをいふ、其言下に丸が来て十四歳になる弟に當り、ひりくとして死んでしまつた、といふやうな記事、又路傍で産をして田の水で産湯をつかはしたといふやうな記事は寫生文的で面白い。形容澤山の戦記類などよりも斯ういふ眞率な記事が誠らしくて感じが強い。

(三)

又斯ういふ記事がある。

又子ども、彦根のはなし、被成よといへば、おれが親父は、知行三百石とりて居られたが、その時分は、軍が多くて何事も不自由な事で、おじやつた。勿論用意は、めんくたくはへもあれども、多分、あさ夕雑水をたべて、おじやつた。おれが兄様は、折々山へ、鐵砲うちに、まゐられた。其とき、朝菜飯をかきぎて、ひるめしにも、持れた。その時に、われ等も菜めしをも

らうて、たべておじやつたゆゑ、兄様を、さいくすめて、鐵砲うちにくとあれば、うれしうて、ならなんだ、さて、衣類もなく、あれが十三の時、手作のはなぞめの帷子一つあるよりほかには、なかりし。そのひとつのかたひらを十七の年まで着たるによりて、すねが出て、難義にあつた。せめて、すねのかくれるほどの帷子ひとつ、ほしやとあもふた。

朝夕雑炊を食つてゐたといふだけの記事では力が弱いが、兄の鐵砲うちに行く時だけ菜飯が貰へるので嬉しかつたとある爲め叙述に力がある。又手作りの帷子一つとばかりいふのでは物足らぬが、「花ぞめ」といひ、「臍が出て難義であつた」といふてあるので面白い。

(四)

卷末に斯ういふ編者の附記がある。

右去曆土州親類方へ下り浪人土佐あま、山田喜助、後に蛹也と號す。おあんは雨森儀右衛門へ嫁す。儀右衛門死して後、山田喜助養育せり。喜助の爲には叔母なり。寛文中、よはひ八十餘にして卒す。予その頃、八九歳にして、右の物語りを、折々聞覚えたり。誠に、光陰は矢の如しとかや。正徳の比は、予すてに、孫ども集めて、此物語りして、昔の事ども、とり集め、世の中の費をしめせば、小ざかしき孫どもが、むかしのおあんは彦根ば、いまのお様は、ひこねぢいよ。何をおじやるぞ、お世は時々じやものをとて鼻であしらふ故、腹もたてど、後世あそるべし、又後世いかならむ。孫ども、またちのが孫どもに、さみせられんと、是をせめての勝手にいうて、後はたいなまいだくより、外にいふべき事無かりし。

211 「彦根は」と云々とあるのは、其前に

又しても、彦根の事をいうて、叱りたまふ故、後々には、子ども、しこ名を、ひこ根はゞといひし。今も老人のむかしの事を引て、當世に示すをば彦根をいふと俗説にいふは、この人より始まりし事なり。

とあるに基いて居る。

八十になるおあんはゞが、昔を語つて今に不平なのは、余が丁度八九歳の頃七十四五であつた祖母が所謂彦根をいふてゐた面影も偲ばれて、餘所事ならず覺える。やがて余も亦此筆者と共に「孫ども、亦おのが孫どもに」云々と不平をこぼして昔を偲ぶ時が来るのであらう。之を思ふと、此世の中は「おあん物語」が常に／＼繰り返されてゐるものともいへる。

古火桶 おあんはゞとあと名づけけばや

天和以前の芭蕉の句

天和以前の芭蕉の句はまだ談林調で文學的に價值のある者は殆ど無いといつてよい。試に春の句のうちで稍々取得るべきものをあげて見やうならば

かびたんもつくばせけり君が春
紅毛も花に來にけり馬に鞍
猫の戀へつひの崩れより通ひけり

李下芭蕉を贈る

芭蕉植て先にくむ萩の二葉かな

位であらう。當時はカピタン、オランダなどを大膽に材料にして居る點が得意

であつたのだらうが、其のみならず「つくばせけり」といひ「花に來にけり」といふ語の斡旋で面白くなつて居る。他の二句は、へつゝひの崩れより通ふといひ滑稽、芭蕉を愛すといはず、萩の二葉を憎むといひし狂味で面白くなつて居る。

併し「一葉集」に在る天和以前の春の句約六十のうち取るべきものは前に擧げた四句に過ぎぬ。夏の句以下も殆ど同様の比例である。極言すれば天和以前の芭蕉にはまだ文學的俳句といふものがわから無かつたのである。俳句の創造者ともいふべき芭蕉は四十歳頃迄夢中を辿つて居つたのである。蓋し當時談林調は既に陳腐を極めて是非一變化を要する時機であつたのだ。其煩悶のあとは「虚栗」等に見える。天和以前の芭蕉の句にも見える。

今日に在つても俳句は既に過去の文學だ、新しい短詩が生れねばならぬといふ人がある。これも一應尤もの説だ。併し如何に變化するかはやつて見ねばならぬ、二十年三十年の煩悶を重ねれば結果は見られぬ。余は寧ろ今日の俳句を天和以前の芭蕉の句と同様に見る時代の來らん事を希望する者である。

力の這入つた句

句を作る時分には充分に力を籠めて作らねばならぬ。力の這入つた句と這入らぬ句とは一見してわかる。力の這入つた句は調子が引き締つてゐて、一言一句のたるみがなく、材料もぎつしりはまつて居て動かすことは出来ぬ。斯ういふ句は吟咏して溜飲の下るやうな心持がする。併し乍ら茲に一番注意を要するの

は、力の遣入った句といふのは斯く外部に充分其力の現はれてゐる句許りてはなく、外見は平々他奇なく殆ど人の注意を牽く程の材料も調子も無いに拘らず、其内部には非常に大きな力の籠つて居る句が別に存在して居るといふ事である。例へば或句を作る場合、前者は或趣向を得て其を現はす爲に材料の選擇文字の斡旋の上に大いなる苦心をする、後者は或感興を得て其感興を或趣向に纏める迄に殆ど精力の八九を消費してしまふ。爰に於てか其趣向が纏つて後には材料の選擇文字の斡旋等には前者程重きを置く餘裕が無くなる。前者を見る場合にはよく其材料、句法等の上に苦心を看取してやらねばならぬ。後者を見る場合には材料、句法よりも奥の方に苦心の伏在して居る事を看取してやらねばならぬ。子規居士の句作、選句共に此の後者に重きを置いた事は明白な事實である。

俳人のゆとり

俳人に小説の話をする時、話すものを俳句に不熱心なものに見做す、建築の話をして、音楽の話をして、繪畫の話をして、凡て俳句に關係無い無用の言と心得て居るやうだ。況して商買の話、政治の話、宗教の話、彼等は是等の話をするのも聞くのも罪惡のやうに心得て居る。俳句に熱心なのはさる事ながら是ではあまり量見が狭ま過ぎる。新らしい俳人には殊にゆとりが無い、責めて文藝の上だけでも今少し広い趣味を持つて欲しい。責めて俳句其ものゝ上にだけでも今少し広い趣味を持つて欲しい。

「ももすもも」の序

あゝら 廣き野中の露の子規忌哉

「ももすもも」の序

蕪村の「俳諧桃李序」に曰、

いつの程にか有けむ四時四まきの歌仙有春秋はうせぬ、夏冬はのこりぬ。一人請て木に刻らんと云、一人制して曰、この歌仙ありてや、年月を経たり恐らくは流行にあくれたらん。余笑て曰、夫俳諧の活達なるや實に流行あつて實に流行なし。たとは、一圓郭に添て人を追ふて走ることし。先んずるもの却て後れたるものを追ふに似たり。流行の先後何を以てわかつべけんや。た

日々にはそれが胸懐をうつし出て、けふはけふの俳諧にして翌は又あすの俳諧也。題しても「すもも」と云へ。めぐりよめともはしなし。是此集の大意也。今の俳句界に於て漫に流行を口にするものは一度び此序文を讀て靜思するの要がある。又卿等の後に走りつゝあるが如きもの何ぞ計らん卿等に先だつ事一圓郭のものならんとは。

縁にさす 冬日や日々に新たなり

組織的なる俳句論

俳句を作る人は大分多い。併し學問的に研究する人は少ない。殆ど絶無といつて

組織的なる俳句論

よい。もうそろそろ系統ある組織的な俳句論でも出て來たらよからうと思ふ。俳句を作る人は他の文學者などよりも趣味はよくわかる。少くとも早くわかる。併し其癖として他の文學を輕蔑する。輕蔑しないまでも閑却する。彼等の頭は丁度鎖國時代の勤王黨の頭のやうで、日本ほどえらいものは無いと考へるのは悪くないが、世界にどんな強國があるのかといふ事も知らずに威張てゐるのだから劍呑だ。斯ういふ人々の爲めに日本といふ國は輿地圖の上でどういふ所に位してゐてどういふ處が他に比較して強い、といふ事を知らしめてやるのは先覺者の任務であらう。其を知らしめるのには凡ての文學論と沒交渉で無い系統ある組織立つた俳句論が欲しいと思ふ。

俳句趣味よく俳人どもはいふが、俳句趣味とは何ぞやと聞かれて明快な答を與へ得るものがあらうか。俳句趣味なるものも學問的には研究されてゐないのである。

月並くとよくいふが、月並とは何ぞやと聞かれて明快な答を與へ得るものが幾人あらうか。月並なるものも學問的には未研究である。

品川の砲臺は汐干や沙魚釣りの景物となつてしまつて、薩摩艦が横須賀で進水された時、尙維新當時の鎖國論者が俳壇に存在してゐるのは滑稽だ。

北窓をいつまで塞ぐこゝろかな

俳句八品

句の品位に三つの要素がある。材料、趣味、句法が是れだ。其うち一番大事な

俳句八品

のが趣味で、次が句法、材料は第三に位する。

一、材料は五月雨であらうが鮭であらうが荒海であらうが小便であらうが、作者の趣味の高下で高尚にも下等にもなる。それで比較的重きを爲さぬ。

一、趣味とは其五月雨なり鮭なり荒海なり小便なりを其作者は如何なる趣味で観察するかといふ事だ。此趣味の高下大小で俗人詩人、小詩人大詩人は分れるのである。即ち趣味が第一の生命だ。

一、其趣味がいかに高尚でも其趣味によつて観察した材料並に其感興を充分に人に傳へるには一に句法の巧拙による。趣味と相俟つて大事なのは句法だ。其處で俳句に左の八品がある。

上	品	趣	味	句	法	材	料
	高	高	高	高	高	高	高
	尚	尚	尚	尚	尚	尚	尚

蕪村忌

蕪村

中	品	上	性	高	尚	高	尚	下	品
中	品	中	性	高	尚	下	品	高	尚
中	品	下	性	下	品	高	尚	高	尚
下	品	上	性	高	尚	下	品	下	品
下	品	中	性	下	品	高	尚	下	品
下	品	下	性	下	品	下	品	高	尚
下	々	品		下	品	下	品	下	品

銀杏の八つの實に彫る佛かな

「燕村忌」は新俳句に於ける唯一の年中行事ともいふべきものであつた。其後「新年會」が出来、又「子規忌」が出来てから三行事の一つになつた。

「燕村忌」に寫眞を取つたり風呂吹きを食つたりすることは何事にも一趣向を立てる子規居士のこれも趣向であつた。さうして大阪からは水落露石が必ず天王寺燕の漬物を送つて来る。

露石といへば「燕村忌」を修することを最初に思ひ立つたのはたしか露石であつた。大阪でやるといふ事を聞いて東京でもやることになつたのであつた。

子規居士が亡くなられてから寫眞には母堂に加はつて貰ふ。今年妹君にも加はつて貰ふ。會するもの十八人、母堂と妹君を取り巻いて古庭の片隅で撮影した。

「燕村忌」には一度も雨が降つた事が無い、其故一度も寫眞を取らなかつた事が

無い。兼題「年忘」五句。

今年も古き曆と忘れけり
 年忘れ柱にもたれ話しけり
 酒淡く年忘れけり二三人
 酔ふて泣く人尤めなし年忘
 酔中に年忘れ草生ひにけり

第二俳壇

新俳句が「日本」紙上の子規居士の鼓吹で漸く世間の認むるところとなりかけた

時分、眞先きに聲援を與へたのは「國民新聞」であつた。當時國民新聞社員としては今「二六新報」に在る中村樂天氏があつて、折節北里の病院に在つた上原三川、直野碧玲瓏、東洋、春風庵、竹采の諸氏等と盛んに句作して居た。其聲援の手始めとして「國民」紙上の俳句の選を余に委任された。されば日本全國新聞中「日本」に次で眞先きに我新俳句の掲載された新聞は「國民新聞」であつたのだ。「日本」と「國民」とは政治上の意見は反對だが、文學は共通だとは當時蘇峰氏の戯言であつた。其後明治何年であつたか、何でも三千號の祝のある頃まで余は其任に當つてゐたが、終に多忙の爲め辭退して、爾來青々、左衛門、家巢諸氏の手を経て今日に來た。

扱今回又此舊知の俳壇を委任されることとなつた。併し余には「ホト、ギス」ある外今碧梧桐が旅中に在る爲に「日本」の俳句を擔當して居る。其上に又此俳壇迄をも引受るのは力に及ばぬ。然し乍ら余の爲には故國の感がする許りか、我新俳句の第二俳壇（「日本」に對していふ）として紀念すべきものである處から絶對に辭することも出來ず、他日何等かの機會に到着する迄、極めて寛大なる條件の下に暫くお受けをすることゝした。

今後載する句は同人諸君の手紙の端に在る者などを中心とし、之に特に本紙に投稿される者を附加するとする。尙投稿される人は必らず國民新聞社宛に願ひ度く又「日本」と同一の投稿は（余が「日本」選者たる間は）全然謝絶する。

こゝ迄書いて來て思ふに、今や日本全國の新聞中俳句を載せぬものは殆ど無い位だ。我本土どころか、朝鮮、桑港、濠洲あたりの新聞に迄見るやうになつた。其何百種の新聞紙中我「國民」は第二番目に新俳句を掲載して、殊に新俳壇を開拓する上に「日本」を助けて多少力をも盡くした事のあるものだと考へる

と、聊か得意の情が起らぬでも無い。とこで例の通り、此得意を其まゝ剝き出しに、余は此文章に題するに「第二俳壇」の語を以てする。

昔戀しや樂天三三川も歸り咲け

「日本」の俳句

昨五日舊日本新聞社員たる三苦亥吉氏の來宅によつて初めて今回三宅雪嶺氏以下が連袂退社の模様を審かにした。

「日本」は實に我新俳句の發祥地であつた。曩きに社長の代つた當時俳句に就て云々の流言を耳にした時の如きは、假令社長が之を排斥しても俳句の方で動く

ものかと考へた。これは「日本」に尙舊來の精神ありとしての事であつた。併し今回の出來事たるや、舊來養はれたる「日本」といふ名と殆ど分離すべからざる雪嶺氏以下の退社である。「日本」といふ名は残るとも「日本」といふ精神は新聞紙を離れてしまつた觀がある。別に新日本新聞社より俳句禁載の命には接せいで、諸先輩と共に去就を共にする方が我新俳句氏の爲に採るべき處置と考へる。新俳句氏は「日本」を退いた。「日本」の俳句が恨びたのでは無い、「日本」の俳句が新聞紙を離れたのだ。新聞紙より「日本」の精神が離れたと同時に俳句も離れたのだ。我が「日本」の俳句は尙活潑々地として生きて居る、恰も「日本」の精神が活潑々地として生きて居るやうに。

名草枯るゝとな仰せたまひそよ

「日本」投句家に告ぐ

「日本」投句家に告ぐ

余は昨六日「日本」に左の記事を送つた。併し本日の同紙上には掲載されなかつた。

俳句投稿家に告ぐ

余は舊日本新聞社員の代表者としての古島一雄氏より舊日本新聞社員たる河東碧梧桐氏の不在中其代理として俳句の選者たるべき依頼を受けたり。諸氏の去りたると同時に余の責任は自ら解除されたるものと認む。従來の投稿は余の許に在り。此の投稿の處分法に就ては決定次第「日本人」ホト、ギス」紙上にて告白すべし。

十二月六日

高濱 虚子

諸方より問合せがあるので取敢へず此の欄を借りて舊「日本」投句家に告げて置く。

尙昨日新日本新聞社員たる胡桃正見氏が見えて、日本新聞社は俳句を歓迎して居るのである。碧梧桐氏等の退社によつて君の責任は自ら解除された、といふ事なら、改めて選者たる事を君に依託すれば如何との間に接した。余は厚意は忝なきも謝絶する外は無いと答へた。

余は新日本新聞社と何の恩怨も無い。私情に於ては忍びぬ處もある。而も事實の推移を明白にして置く事は、子規創始の我「日本俳句」の尊嚴を保持する上に於て缺く可からざる事と信するのである。

子規生きてあらばいかにと鐘 研る

「日本」投句家に告ぐ

詔諛二句

追従に鳴子引くなり物貰ひ一

追従などいふ俗な言葉は逆も俳句にはなりさうも無い。併し其が乞食の追従だけに厭味が少ない。其上に其追従にする事が鳴子を引くのであるから厭味は取れる。厭味が取れる許りか、かゝる種類の追従もある者かと却て興趣が湧く。

へつらへる男にやりぬ蘭の花青々

此句も「蘭」の幽高な感じて「へつらへる男」の俗を救ふて居る。蓋し此句に二様の解がある。人にへつらふ男に此蘭の清高に耻ぢよと殊更に與へた、とするのが一つ、其へつらふ小人も必らずしも遠ざけず、或時請ふがまゝに一鉢の蘭を與

へた、とするのが一つ。作者の意は固より前者にあらう、さうで無ければ蘭が充分に利かぬ。而も余は或は後者に解する者あるを尤めぬ。前者は高い代りに狭ま苦しい、後者はあぶない處もあるがゆとりがある。

連句一片

酔ふて下部の刃抜きけん路曳
漸暮て祭りの神輿過るなり竹裡

はじめの句は何處かに騒ぎがある、其れは酔ふて喧嘩をした揚句、酒癖の悪い下部が終に刃を抜いたのが始まりらしい、といったやうな意味であらう。次

連句一片

の句は稍々暮れかゝつてお祭りの神輿が通る、といふだけの事だが、此の句の趣向は、其の「漸暮れて」といふ上五字にある、普通ならば神輿は晝間に通つてしまはねばならぬ、其が漸暮れかゝつて通るのは何か變事があつた爲めであらう。其處で始めの句と併せて考へると、或祭りの日下部が刀を抜いたのが始めて大喧嘩があつた、其の爲め一時は神輿の渡御も止めて町中騒ぎであつたが、漸く静まつたので、日暮過ぎてから神輿が通つたといふ趣向かと覺える。但し此の前後二句の間には尙種々の異つた解釋を試むる餘地がある。連句は其處が短所て又一方からいへば面白味のある處だ。めいゝゝいろゝゝに考へて見るがよからう。

闇三句

一夜づゝ、闇になりゆく踊かな 李 收

此句意は、盆から毎夜引續いて踊りをする、盆の十五夜から十六夜十七夜となるに連れ月が少しづつ缺けて来る、其上日没から月の出迄にはだんゝ間が出る。そこで一夜づゝ闇が殖えて行くといふのである。

かけゝて月も無くなる夜寒かな 燕 村

此句も、十五夜十六夜から二十一夜二十二夜とだんゝ月が缺けて来て三十日には終に無くなつてしまふ。同時に十五夜頃は左程にも無かつたが一夜ゝと寒さを増して来て三十日頃には一段と夜寒を覺えるやうになつた、といふので

ある。

右の二句は似た句であるが、夜寒の句の方は單に景色を想像せしめる許りてなく、「月も無くなる」とある此「無くなる」といふ文字で主觀的に夜寒の心持を強めて居る。何でも物は殖える方は賑かだが無くなる方は淋しい。寒げな月でさへ無くなるといふ事は淋しい、其が一層夜寒の感じを強めるのである。同じ景色を現はすにも「一夜づゝ閨になりゆく夜寒かな」としたのは單に景色を現はすだけの事になる。踊りの句は通り一遍の句である。夜寒の句は抜目の無い句である。

閨の夜に終る曆の表紙かな 蕪

此句は、極月も末になるにつれ閨になる、曆も終りになつて黒い表紙になるといふのを（無論舊曆で曆もお經の様な折手本のものとするべし）掛合はせたの

鶏頭三句

が趣向である。閨になるといふ事を徒事に使はず、年の暮るゝといふ事と曆の表紙の黒いといふ事に掛合はせたのはこれも抜目の無い處である。此句に比べると踊の句の如きは餘程間の抜けた處がある。併し乍ら夜寒の句は抜目の無い爲め句に力が這入つてゐるが此句は却て輕薄になつてゐる。夜寒の句は趣味の上に力を添へて居るが、此句は單に機智を弄したのに過ぎぬ。

糶・干せる筵の間や 鶏頭花井村

鶏頭に何々を干すといふ句は非常に多い。鶏頭の赤く立つて居る秋日和の庭に

筵を敷いて物を干すといふ事は誰でも考へつく事だ。殊に糶を干すなどは陳腐極まる。そこで多くの人は其干す物を新らしくせうとしている。苦心する。豆、粟などの農産物は五十歩百歩なので、薬、布團、衣服、書物、墨、佛等土用干の材料を大方轉用する。併しこれも五十歩百歩だ。其處で此句は干すものは矢張普通な糶として置いて、其筵と鶏頭との位置を明白に描いて居る。廣々とした庭に糶を干し廣げる、其筵と筵の間の處に赤い鶏頭が突立つて居るといふので印象が明瞭だ。單に「鶏頭に何々干したり」といふ句に比べると一步を進めて居る。其が爲め清新な句になつたと迄は行かぬが先づ一通りの句になつた。

本堂の眞正面や鶏頭花榎村

寺に這入ると鶏頭が咲いて居るといふ著想も先づ百人が百人思ひつく處だ。其處で寺を町中の寺といつたり、穢多寺といつたり、蕨葺きの寺といつたり、眞

宗寺といつたり、敷石の左右に立つて居るとか、庫裡の横に立つて居るとか、墓原に立つて居るとか、屏の崩れ目に立つて居るとか、いつて一點の新らしみを附加せうとする。此句も其一例で本堂の正面と限つて位置を明かにして居る。本堂の眞ツ正面に一團の鶏頭が突立つて居るのは敷石のほとりにあつたり、庫裡の横にあつたりするのに比べると比較的新しい、又言ひやうも思ひ切つて居る。是れ亦清新と迄は行かぬが、一通りの句にはなつて居るといつてよからう。

西日さす庭や鶏頭の影法師羊水

鶏頭に日が當るといふのは是も亦陳腐極つた趣向であるので、此句の如きも一寸見には何の價値も無いやうだが、よく見ると、此影法師が極めて明白に描かれて居るので愉快だ。此庭には恐らく他の草花などはあまり無いのであらう、唯

鶏頭がポカン／＼と突立つてゐる、其に西日がさすと長い鶏頭の影が其何も無い庭に映る、といふのであらう。殊に此庭には西日になつてからよく日が當るらしい。これも清新な句といふては無いが棄て難い處がある。

萩の句

櫛落とす舟の遊女や萩の浪 松

萩の句は大方枯淡に傾く。若し萩許りて配合物無しに作つたら

さはだちて萩静まらぬ・夜風かな 田士英

松川や萩の中なる十二景 生田樓

といふやうに萩の景色のうちでも色氣の無い枯れた句になる。假令人事を配して

阿武隈の仕舞渡しや萩の月 滴 泉

波路遙かの舟上る人や萩の聲 嫩 葉

といふやうに寂びた方面の事柄を叙するやうになる。其中にも此「櫛落とす」といふ句は濃艶な趣味の遊女といふものを配合して枯槁な萩に色彩を添へて居る。此點が萩の句としては一寸珍らしいと思ふ。尤も遊女にもいろ／＼ある。此遊女は所謂淺妻舟の類で貧しい淋しい連想の起るもの、殊に其が櫛を落とすといふので益々其感じを強める。反對の配合物であり乍らよく調和するのは半面に此共通の趣味があるからだ。

唐辛子の句

辣 韭 の 酢 壺 に 浮 く や 唐 が ら し 里 石

唐辛子が煮物や漬物の中に交つて居るといふ趣向は澤山ある。殊に其唐辛子の赤く點綴されてゐる點は誰も著眼する。それだけでは平凡で特に珍重するに足らぬ。此句は色の點などは讀者の連想に任して、辣韭の中に唐辛子が如何に交つて居るか其状態を精細に描いて居る。其も唯交つて居る陳腐な場合で無く或特別な場合を見出して居る。辣韭の壺を開けて見ると辣韭は皆底に沈んで上に酢がたまつて居る、其中に赤い唐辛子が浮いて居るといふのである。其浮いて居る點に著眼したのが此句の手柄だ。

又辣韭ならば無論酢につけた筈なのを特に辣韭の酢壺といひ、酢といふ事を讀者の頭に確と印象させて其酢に唐辛子の浮いて居る事を認識させた叙法は巧みである。

鼻 つ ま る 老 が 寝 酒 や 唐 辛 子 素 泉

寝酒に唐辛子を食ふといふ趣向はこれもいくらでもある。其を一步進めて老いの寝酒と限つたのも珍らしくない。二歩進めて「鼻つままる」といつた處に此句は新らしみがある。

團栗の句

團栗の落ちずなりたる嵐かな 子規

この句を態々讀めて來た人がある。よく趣味のわかつた人だ。表面に骨立した面白味は解する人が多いが、斯ういふ風に力の内に籠つた没骨的の面白味を解する人は今の俳句界には少ない。此句の中には長い時間がある。亦かゝる句を作る人の心の側の面白味も想像される。其れをわからぬ人の爲めにいふて見やうか。

裏の庭に櫟がある。團栗が出來てから度々落つる。まだ青い時分はさう澤山も落ちなかつたが熟して來るに従つてだん／＼數多く落つる、いつかの大嵐の時などは殆ど落盡くしたかと思ふ程澤山落ちた。併し其後ちも尙少しづつ落つる。しまひにはまだ残つて居たのかと氣がつくやうに時々一つ二つ落ちてゐた。併し此頃になつてもう一つも落ちなくなつた。と斯ういふ句である。併しこれだ

けてはいひ足らん。

單に「團栗の落ちずなりたる」といふだけでは以上の解に留まるが、下に「嵐かな」とある。これが此句の半分の生命だ。嵐は此團栗の落ちをめる時から、もう落ちなくなつた今日迄常に吹いて居る。いひかへれば斯く團栗の落つるのも嵐の爲に落つるので、いつも嵐の吹く度に團栗の落つるのを見、若くは音を聞いてゐたが、此頃はもう嵐が吹いても團栗は落ちないといふのである。此句が描く表面の嵐は現在の嵐だ。即ち團栗がもう落ちなくなつたと感じた今吹く嵐だ。併し「落ちずなりたる」とある言葉の爲めに以前何邊か吹いた嵐が、二個の對立した鏡に寫る蠟燭の火の影の奥深く限り無いやうに、想像される。うちに力の籠つて居るといふのは是だ。

其のみては無い、此句の描いて居る景色は全くの市中で無い限り種々の處に在

り得る景色で、別に山澤を尋ね廻つて見出したといふやうな景色では無い。併しながら斯ういふ景色に意を留めて、嵐と團栗との長い間の出来事をちつと静に頭の中にとどめて置いて終に最後のもう落ち無くなつた時はじめて満を放つて「落ちずなりたる嵐かな」といつた此作者のしつとりした考へが人に與へる感興は少くない。表面はすらりとした平らな他奇無い句であるが、此平らな他奇無い句を作る迄に經來つた路は遠くして長い。其遠くして長い路が、靜に此句を翫味するに従つてはる／＼と想像される。内部に力の這入つた句といふのは是等の點だ。

斯ういふ風の句は兎角平凡とか陳腐とかいふ十把一からげの眼光不徹紙背的評の下に今の俳人には排斥されるのが普通であるのに、特に此句を面白いといつて來た人あるに乗じて解説を試むる事如件。

附言。從來兩三度此「一口嘯」欄で一言した句は悉くいゝ句として特に引例したわけでは無い。唯かゝる節にも意を留むべきものとして兎角人に觀過されやすき點をとり出して見たに過ぎぬ。其點だけを除けば句として價值の多くないものも交つて居る。今後とても同様だ。讀者諒せよ。

寫生の芋と空想の南瓜

眞白にさらされし芋や土の中法師

鎌で芋を掘る時、誤つて鎌の尖で芋を切つた、といふ事はほんの些事だ。別に面白くもなんとも無い。併し作者は其ありふれた些事をも輕蔑せず、目を眠つて

嘗つて見た事のあるさういふ場合の景色を再現して見る。鍬を芋にうち當て、はつと思つて其跡を見ると芋の切り口が白く、黒い土中に見えて居つた事が目に浮ぶ。こゝだと早速其處を捉まへて「真白にさらし芋や」とする。爰に於て其ありふれた些事のうちに、一點の詩趣ある景色を見出し得た事になる。

黄金を腹一杯の南瓜かな 八重櫻

南瓜の肉はいふ迄も無く黄色い。併し南瓜の肉の黄色いといふ事はあまり普通だ、西瓜の肉の赤いといふのと同じ程度に普通だ。これを庖丁で剪つたら黄色い雫が垂れたとか、煮え立てが湯氣立つて殊に黄色いとかいつたのでは、格別の興味は無い。併し作者は普通な事に特別の感興を持つて、其心地よく黄色い點に満腹の同情を傾ける。殊に唯黄色い許りて無く、黄色い肉がはちされるやうに充實してゐる點に意を留める。さうして其肉を「黄金」と思ひ切つて形容する、

更に進んで人に擬して「腹一杯」といふ。爰に於て其普通過ぎる程普通であつた事も普通ならざる材料と變化した。

蚊の句

蚊寄つて柱の拂子怪めり 井泉水

古句 譏る一座をいたく刺す蚊哉 同

水打てば怫然と來たり刺す蚊哉 同

右三句いづれも蚊を有情のものらしく叙して居る。柱に掛つて居る拂子に蚊がとまつたり飛んだりして居る、といふだけの景色では平凡なので、作者は自己の

情を蚊に移し、妙なものが掛つて居ると大勢の蚊が寄つてたかつて拂子を怪しんで居るといひ、斬新な句として居る。第二の句も、夏の夜蚊にくはれ乍ら、四五人が團座して古い句をつまらぬ句だ俗な句だなど、譏つたといふだけの事ではたいした趣向でも無いが、作者は又蚊を人間らしく見立て若輩の分際で古句を譏るなどは生意氣だと蚊が古句の肩を持つて復讐的に其一座のものを刺したとして初めて句に力がある。(いたく、といふ字は巧みだ。見逃すことは出来ん)第三の句も、夕暮水を打つたら葉蘭などの間から蚊が出て来て刺すといふのは陳中の陳だ。其を擬人法にして「怫然」といひ「來たり刺す」といつたので、陳を脱して居る。

煙草の句

虫ばみてさながら辛き煙草哉 素 泉

虫ばみし葉が辛さうな煙草哉 弓 月

此句孰がよきかと問ふ人がある。答へて曰、全く同一の趣向である。四五年前ならば余は一も二も無く前句を取つて後句を棄てる。其は「葉が辛さうな」といふ用語が俗で月並臭いからだ。「葉が辛さうな」に比べたら「さながら辛き」の方が雅で調子も引き締つて居る。併し今日では一寸取捨に就て首を傾げる。其煙草の虫ばめる葉及び其葉が辛さうに見えるといふ景情が判然と現はれて居るのはどちらかと考へて見ると前句よりも寧ろ後句の方に在る。「葉が辛さうな」も俗と

いへば俗なやうだが無邪氣といへば無邪氣だ。眞摯だといへば眞摯だ。「さながら辛さ」の方は却て氣取つてゐて厭味があると思へば思へぬ事も無い。考へやうでどちらにも取れる。さうして意は前者の方が却て晦澁に陥つて居る。

されど茲に更に一考すべきは習慣上の感じた。我等は習慣上「葉が辛さうな」といふやうな俗語を使用するとは月並として賤しんで居る。後句は直覺上月並臭い。前句の意が晦澁といふのも比較的の事で、其實晦澁といふ程の句では無い。後句は危い、前句は危な氣が無い、矢張後句を棄て、前句を取るべきか。

されど「さながら辛さ」の中七字が眞率で無いのはどうしても欠點だ。「葉が辛さうな」の俗な事も辯護が出来ぬが「なさがら辛さ」の氣取つたのも辯護が出来ぬ。充分いばへ双方共棄てる外はあるまい。趣向其のものも共に新たらしいといふはさうぬ。

鳴子の句と鹿の句

畦行くや鳴子に顔に雨落つる 櫻碗子

此句は寫生的の手腕に取るべきところがある。一寸見たとてはありふれた趣向に過ぎぬとせられるであらうけれど、「鳴子に顔に」といふ事は机上で捻出し得べき景色で無い。畦道を歩いて居ると顔に雨が降つて來た、といふだけなら十人が十人、百人が百人考へ得るありふれ過ぎた事柄だ。併し自分の顔に雨が當つたと氣がつくと同時に目の前にある鳴子にも二滴三滴の雨を見るといふ、斯ういふ趣向は、親しく實景に接して、實景から深い印象を腦裏に留めたもので無ければ兎ても思ひ及ばぬところだ。殊に注意すべき事は、實景から得て來

た爲めに「雨落つる」と無造作にいつてのけて、其で今雨が降りはじめた時である事が自ら連想される。これが寫生趣味の有難いところだ。若し机上で捻る場合にはどうしても降り出したといふ事を断はらなければ安心が出来ぬ。其爲め説明的になつて力が無い。

鹿の來て 聖の門に 死ぬ 夜かな 鳥不關

此句は前句と反對に、古い書物から得た思想だ。オリジナリティーといふ點に重きを置く人々は斯る二様の句の上に非常な階級をつけて前句は價值ある句、後句は價值無き句と明白な判断を下してしまふ。併し余はさうは思はぬ。清新といふ點からいつたら後句は遂に前句に若かぬ。併し前句は清新な代りに重みが無い、軽い、薄い。後句は清新で無い代りに重し、厚し。昨日もいつた通り俳句の美は感覺美で深い人情的哲學的の美に至つては其本領で無い事勿

論だが、前句に比すれば此後句の方はいくらか人情美に近づいて居る。前句が人に田圃の秋色を描き出さず外何物も無いに反し、後句は何等かの冥想を起こさせる。此冥想といふのも他の文學程では無いが、前句に比すれば比較的深い或冥想を起こす。斯かる思想は古書などに已にある所を踏襲したのではあるが、而もこれを十七字の俳句に用ゐて、俳句といふ特別な詩形が人に與ふる特別な感興を與へ得たとすれば、そこに矢張一の創作的効績を認めねばならぬ。即ち矢張一のオリジナリティーがあることになる。斯る俳句は全く無用といふ論者は固よりの事、寫生趣味を過重して、此の空想趣味を輕視する一派の論者に反省を乞ひ度いのである。前句も面白い、清新なる點に於て、寫生趣味に於て。後句も面白い、重厚なる點に於て、空想趣味に於て。

柴漬の句

堤下に柴漬けし江の廣さかな 醉 佛

此句の面白味がわからんといふ人の爲めに説明を試まう。土手の下に柴漬がしてあるといふだけでは平凡な景に相違は無い。併し此句の面白味は其處に在るのでは無い。「堤下に柴漬けし江」といひ來つて「廣さかな」と終り五字に置いたところに在る。初め「堤下に柴漬けし江」といふだけでは唯或川があつて其土手の下に柴漬をしたといふ事柄だけほか想像が出来ぬ、其處へ持つて來て「廣さかな」といふ爲め其江は非常に廣い江であることが想像される。初めは唯近景を描く、しかも其近景は「土手下に柴漬けし」と比較的細かく色濃く描いて置

く、さうして思ひもよらず「廣さかな」といふて、今度は遙々と向うの岸迄を想像せしめるやうに遠景を描く、しかも今度は僅に五字で漠然と色薄く描いて居る。たとへ土手下に柴漬けた光景は平凡でも巧みに描かれた此の廣い江は珍しい。巧みに此の廣い江を描く爲めに土手下に柴漬けた光景を持って來たとすれば、其平凡な光景が却て平凡ならず生かされて使用されてゐるといつてよい。余は旨い句と思ふ。

俳諧一口噺(終)

明治四十年五月二十日印刷
明治四十年五月廿七日發行

俳諧一口噺

金五拾錢

著者 高濱 虛子

發行者 東京市京橋區五郎兵衛町廿二番地
金尾 種次郎

印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
佐久間 衡治

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社 秀英 舍



發兌元

東京京橋區五郎兵衛町廿二番
(振替貯金口座三八一七番)

金尾文淵堂

元	賣	發	書	圖	堂	淵	文
久留米市米屋町	名古屋市玉屋町	名古屋市宮町一丁目	京都市烏丸佛光寺通	大阪市東區南渡邊町	東京市京橋區中橋廣小路	東京市日本橋區吳服町	東京市神田區裏神保町
菊竹金文堂	三輪靜觀堂	星野文星堂	東枝律書房	杉本書店	前川文榮閣	北隆館書店	東海堂書店
							上田屋書店
							東京堂書店

明治四十年五月改正

東京 金尾文淵堂書店

藏版圖書一覽

子規自筆

俳人芭蕉

大本美濃紙摺
定價金壹圓
小包料金拾錢

（子規翁手の形及題詠額面用書箋紙摺及河東碧梧桐氏書簡木版摺添付美濃生判紙二度摺表裝古風帙入）

芭蕉翁は正風俳諧の始祖にして子規子は革進せる俳諧の祖なり此明晰なる頭腦を以て彼の表裏を把抉し高尚なる趣味によりて俳諧の真髓を説く。殊に此書は故人が生前に書残したる原稿紙其儘のものを木版二度摺としたるものなれば其興來に乗じて筆を馳せたる所、塗抹加筆推敲百篇の所及雲湧き龍躍る筆勢の美をさながら紙上に睹るを得べし。

發兌元

東京京橋區五郎兵衛町廿二
（振替貯金口座三八一七番）

金尾文淵堂

河東碧梧桐著

一日一信

(近刊)

定價未定

河東碧梧桐氏昨年飄然として行脚の途につく、明治の芭蕉翁なり。其紀行を一日一信といふ。初め新聞「日本」に掲げしもの、今雑誌「日本及日本人」に連載せり。秋、奥羽を過ぎて、宮城野の信夫摺、衣川の秋風に蕉翁が奥の細道を忍び、冬陸奥の北の果てなる浅虫に籠りて風流に遊び、春近頃、蝦夷の島に渡りて見なれぬ風物に心をなぐさめ、或は思ひをいたましめ、東都のたよりに歸思を催うしなどしたるを、其折々に各地の風俗、人情、歴史のうち、書き交へて、一日一信故郷に寄せつゝ、今や、北海道をめぐり終りて、再び陸奥に入り、出羽を過ぎて、北陸道よりやがて日本津々浦々残りなく終りて、再び陸奥に入り、出羽を過ぎて、北陸道よりやがて日本各地の併況一々見るが如く、名のみを聞いて未だ逢はざる俳人にも目のあたり逢ふ心地してなつかしさにたへざるべし。

發兌元

東京京橋區五郎兵衛町廿二番(振替貯金口座三八一七番)

金尾文淵堂

内田魯庵著

芭蕉桃青

(近刊)

定價未定

芭蕉桃青は世に知らぬ人なき名高き俳人なり、古へ守武、宗鑑以前は知らず、芭蕉出でて、正風を始めてより、俳諧の道に遊ぶもの、男も女も、芭蕉を始祖とせざるはあらず、後代になりては、俳諧の流派出て、明治にいたりては、芭蕉を始祖とせざるは出でたれど、猶ほいづれも芭蕉翁を俳諧の祖として尊崇せぬはなし。こは改めて言はなくも、誰も否む人はなきことなり。今この大俳聖を明治文壇の香宿内田魯庵氏其久しく創作界に隠れたる、評論の筆を以て縦横に評傳し來る、芭蕉の面目躍々として見るが如し。加ふるに畫伯齋藤松洲氏蝶夢が「芭蕉翁繪詞傳」中の古畫數葉を模寫せるものを篇中に挿入したれば、其古色蒼然として俳趣味の溢るゝところ眞に天下の珍本なり。

發兌元

東京市京橋區五郎兵衛町廿二番(振替貯金口座三八一七番)

金尾文淵堂

小説

二葉りきくさ(近刊) 郵金二十錢

内田イワンの馬鹿 郵金二十錢

木下靈か肉か(近刊) 郵金卅五錢

木下火の柱 郵金卅五錢

中村密航婦 郵金七十錢

中村無花果 郵金七十錢

大倉琵琶歌 郵金八十錢

小笠原嫁が淵 郵金六十五錢

德田奈落(近刊) 郵金八十錢

詩歌

薄田白羊宮 送料十錢

薄田童子守唄 送料十錢

高安寢覺草 送料六十錢

河井塔影 送料四十五錢

夜瀨二十八宿 送料六十錢

白一色宗教頌 送料四十五錢

野謝解の葉(近刊) 送料六十錢

興野夢の華 送料八十錢

興野亂れ髪 送料卅五錢

日本及日本人

芝區櫻田鍛冶町十番地
編輯所 政教社
○每月二回 一日十五日
○一冊十五錢 郵税一錢五厘
○半年十二冊 郵税一圓八十錢
○一年三圓六十錢(郵税不要)

「日本及日本人」は新聞「日本」と雑誌「日本人」とを併せたるものなり。主筆三宅雪嶺氏時代に於て社會、文藝、宗教の各方面に大なる權威を有したるが、新社長代りに及びて多年の主張を擯ぐるに逢ひ、即ち雪嶺氏以下二十餘名の社員袂を連ねて退き「日本」の精神を廢滅せしめたり。即ち「日本人」は陸羯南氏、三宅雪嶺氏以下の結社政教社同人の經營し來りし所に於て、また政治、文藝、宗教各方面の木鐸たりき。

「日本及日本人」は「日本」の精神を「日本人」に併せたるものにして、改題以後日尚ほ淺しと雖も、己に鬱然として政界、思想界の上に重鎮をなす。

一、毎號數篇を掲ぐる三宅雪嶺氏の論文は、今や本誌を措きて又見るを得ざるものとなれり、觀察の奇警と行文の莊重と相俟て反映す。「原生界と副生界」は雪嶺氏が哲學上の大文字にして連載已に數十回、また思想界の異觀たり。

一、古島一雄氏の人物評論、八太霞山氏の海外時論、混世氏の學海譚叢、國分青厓氏の評林、三宅花圃女史の花の趣味、井上葵村氏の露國文藝家列傳、内藤鳴雪氏の河東碧梧桐兩氏選の俳句、笠盧主人の篆刻、内藤湖南氏外各大家及政教社同人の時事論評、角田劔南氏の文藝評論等每號各様の光彩を放つ。

發兌元 (東京橋區五郎兵衛町廿二番) 金尾文淵堂

9W-38

早稻田文學

東京牛込區藥王寺前町廿番地
編輯所 早稻田文學社
東京牛込區矢來町二十二番地
文藝協會 文藝協會事務所
○每月一回一日發行一冊廿錢郵
稅一錢五厘半年一圓二十錢一年
二圓四十錢(郵稅不要)

一本誌は元坪内逍遙氏主幹の下に七年間文壇の重鎮たりしもの、一旦休刊の後明治三十九年一月新なる希望と抱負とを以て再興せられたるものなり。

一本誌は文學、美術、宗教、演藝、哲學、史傳、風俗、各方面の評論及び小説、詩歌、脚本等の創作、翻譯を文壇の新舊諸派にわたりて、選拔採録すると共に、每號卷頭には數十頁の長論說若しくは創作、翻譯等の完結せるものを載せ、是而已にても優に一冊の著書たるに足るの面目を具へしむ。

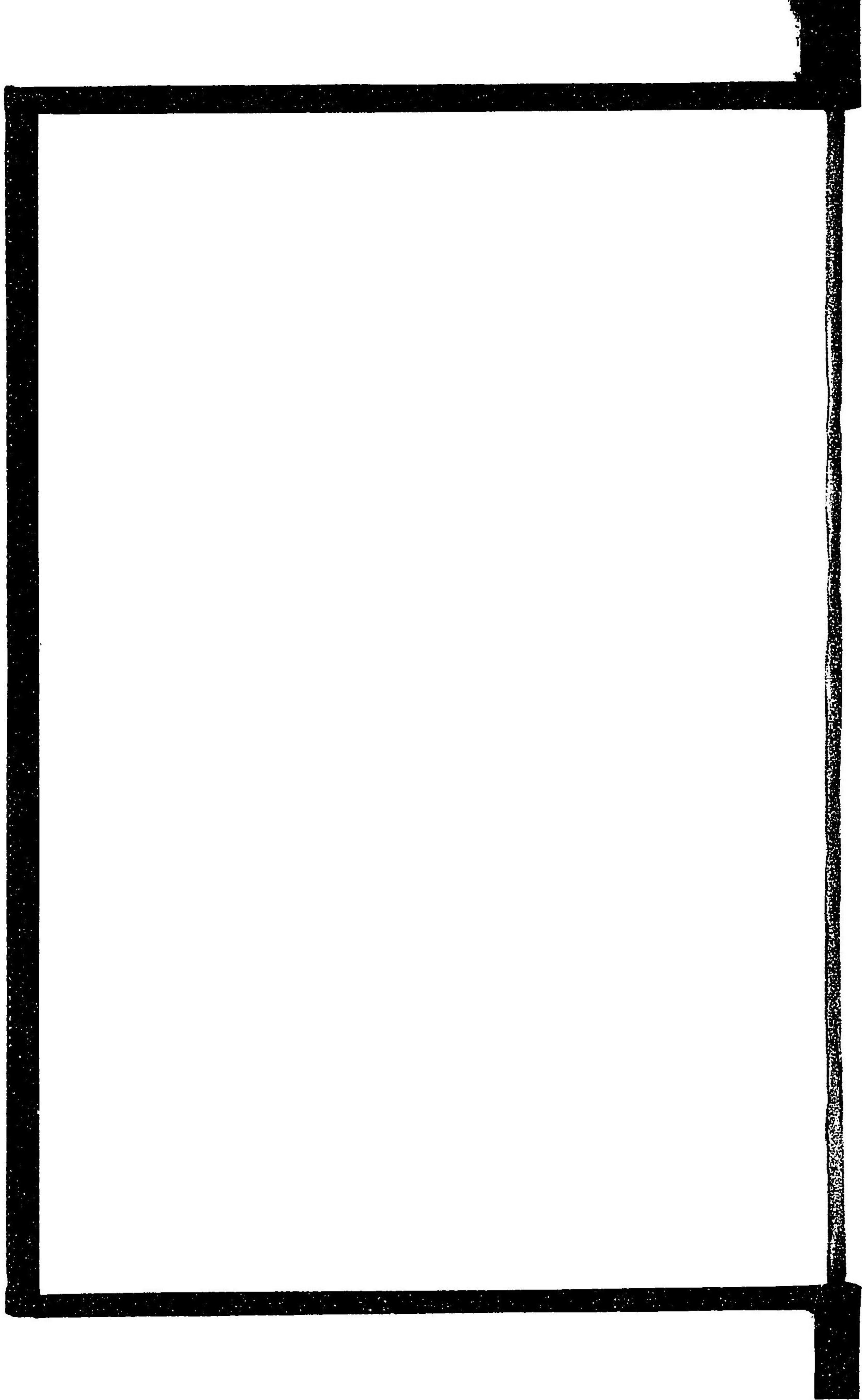
一本誌の彙報欄は文藝、教育諸方面の現状を彙集し、評拆して精博公平穩健を旨とし文壇の趨勢をして一眸の間に去來せしむ、是れ本誌の擅場なり。

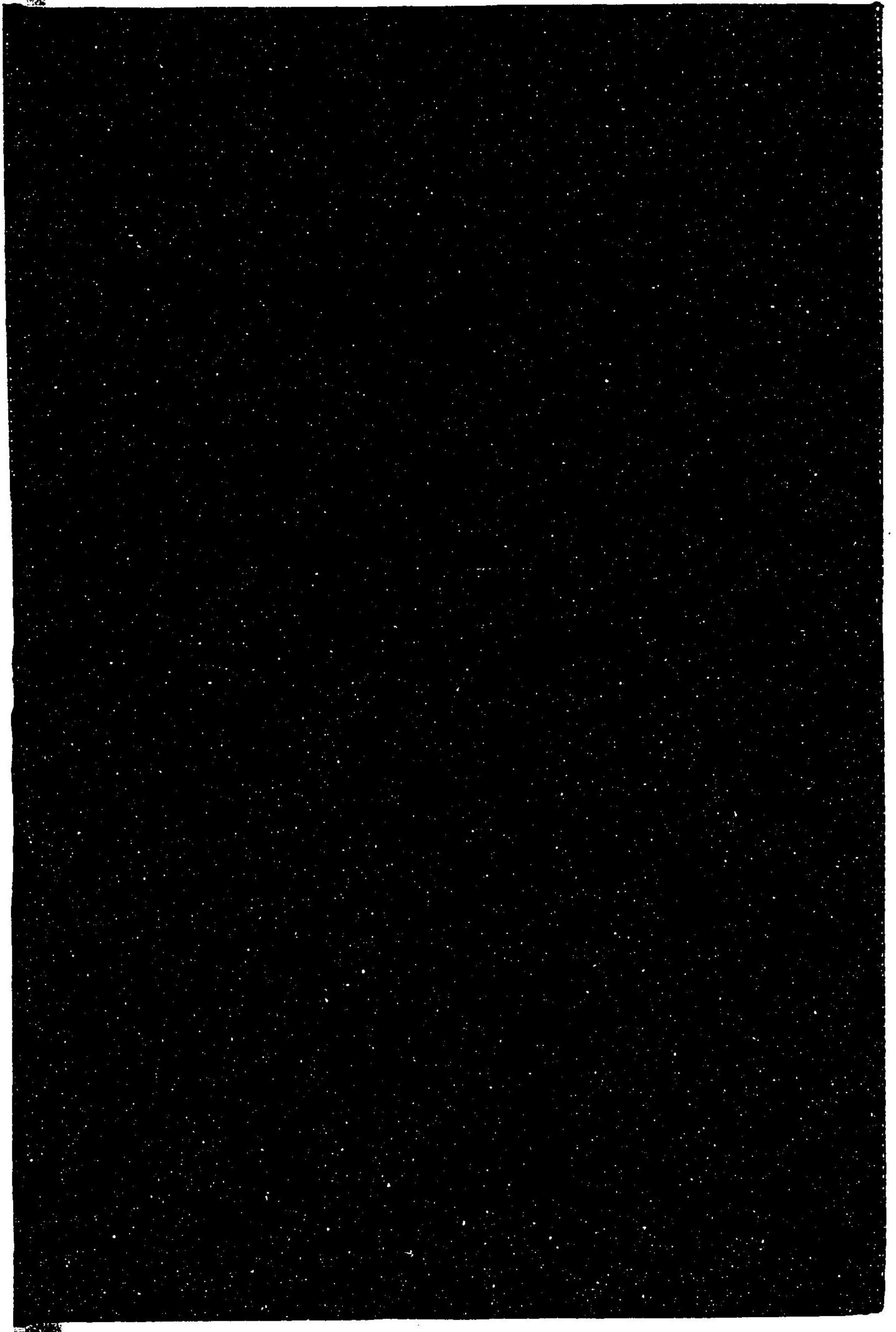
一本誌現在の主幹者は島村抱月氏なり。

一本誌は文藝協會と聯合し之が機關として文藝の實際方面に活動する外、採録する所の文章には何等の偏したる標準をも挾むことなし。

發兌元 東京牛込區五郎兵衛町廿二番 金尾文淵堂 (振替貯金口座三八一七番)







31
346

087348-000-8

31-346

俳諧一口噺

高浜 虚子/著

M40

DBE-0639



